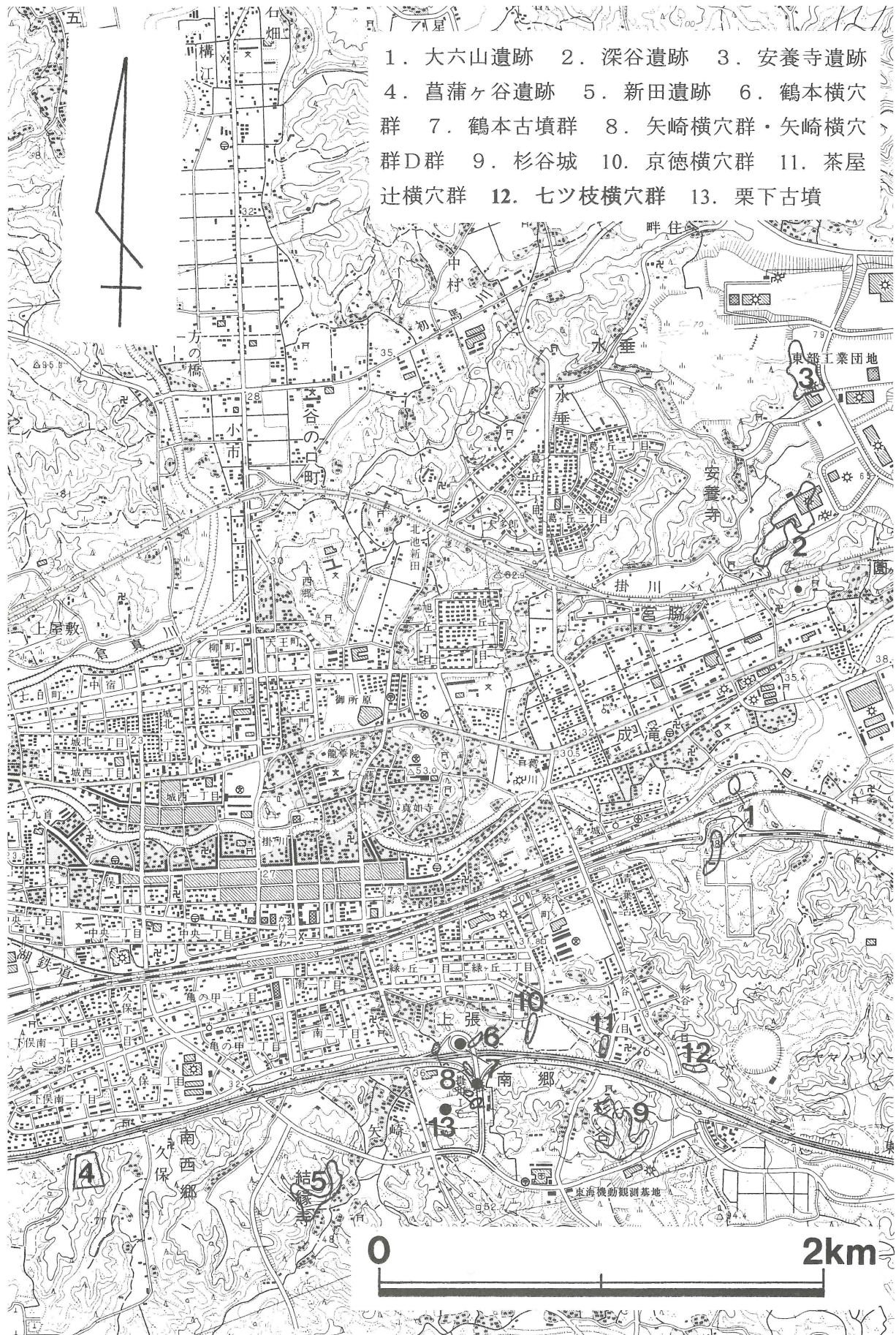


な な つ え だ
七 ツ 枝 横 穴 群

平成11年度農地造成に伴う発掘調査報告書

2 0 0 1

掛川市教育委員会



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と調査の目的

七ツ枝横穴群は、掛川市中心部から南東へ2km程の杉谷地区に所在する。杉谷地区では昭和59年に完成した掛川市立総合病院、平成5年に共用開始した東名高速道路掛川インターチェンジなど、大型の公共事業が行われてきた。さらに現在、東名IC周辺土地区画整理事業が進行中で、これらの開発行為により、地区内の景観は著しく変貌しつつある。

また、昭和63年に開業した新幹線掛川駅により、杉谷地区を含む駅南地域は急速に宅地開発が行われた。調査地点周辺でも、昭和60年代に杉谷・葛川地区区画整理事業が実施された。調査地点の低丘陵は区画整理された部分に隣接し、住宅と茶畑に挟まれている。調査の契機は、平成10年4月、七ツ枝横穴群が所在する低丘陵地を削平して農地に造成したいとの連絡を所有者から受け、掛川市教育委員会が主体となり、平成10年度に国および静岡県補助金事業として横穴の基数、遺存状況を把握するための確認調査を実施し、古墳時代後期の横穴墓2基の所在を確認した。そして、平成11年度に国および静岡県補助金事業として記録保存を目的とした発掘調査が実施された。

2. 調査の方法と経過

平成10年度の確認調査は、農地造成工事計画地の低丘陵地の表土を重機で剥ぎ取った後、続いて人力による横穴墓確認作業を行った。その結果、2基の横穴墓の所在を確認した。

平成11年度が発掘調査では、まず確認調査で発生した排土を重機で処分した後、人力により横穴墓の掘削作業を行った。先に調査着手した横穴墓を1号墓、もう1基を2号墓とし、それぞれ図面作成・写真撮影等を行った。また、国家座標に横穴墓の主軸を拾い出す基準点測量とベンチマークを設定するための水準点測量を業者に委託した。

現地での図面は、すべて10分の1縮尺で作成した。写真による記録は、ブローニーサイズ(6×7)原画白黒、35mmサイズ原画白黒、同サイズカラーリバーサルフィルム、カラーAPSフィルム撮影によった。

調査の経過は以下のとおりである。

平成10年度確認調査

平成10年11月2日～11月11日	調査区内の雑草除去作業
11月12日～11月13日	重機による表土掘削
11月24日	人力による確認作業

平成11年度発掘調査

平成11年9月13日	重機による排土処分
9月16日～10月4日	人力による掘削作業、写真撮影、図面作成
平成12年2月7日～3月24日	整理作業

3. 遺跡をめぐる環境

『掛川市遺跡地図』によると、七ツ枝横穴群は今回調査した低丘陵地に所在する群とそこから北へ約250m離れた所に所在する群の2ヶ所に分かれている。『遠江の横穴群』によれば、七ツ枝横穴群は「杉谷B横穴群」として登録され、「基数は3基、現況は部分的に崩壊」との記述がある。北に離れた地点では、昭和62年度に横穴墓状の遺構を1基発掘調査しており、今回調査された2基の横穴墓を合わせて3基としているのか、『遠江の横穴群』刊行以後に、今回の調査地点に所在していた1基が消滅してしまったのかは定かではない。

七ツ枝横穴群の周辺には数多くの横穴群が所在し、そのうちのいくつかについては、東名高速道路掛川インターチェンジ建設や東名IC周辺土地区画整理事業などの大規模な土木工事に伴い、記録保存を目的とした発掘調査が行われている。また、横穴墓以外の発掘調査では、大六山遺跡（満水）、深谷遺跡（成滝・淡陽）、安養寺遺跡（安養寺）、菖蒲ヶ谷遺跡（下俣）、新田遺跡（亀の甲）などがあげられ、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての集落跡や墓が丘陵上から検出されている。

市内に所在する横穴墓は、『掛川市史上巻』によれば994基、119群を数える。もともと横穴墓はその立地上、埋没していることが多いから正確な数ではない。市内の横穴墓は、6世紀前葉あるいは中頃に造墓を開始し8世紀前半まで続く。分布は市内を流れる原野谷川と逆川流域に広がり、形態や造墓時期等によりいくつかのグループに分類できる。グループ内の横穴群にもある程度の規模の大小や年代差、形態差が見受けられる。また、同時期のもう一つの墓制である円墳の分布は、横穴墓の分布と一部重なる地域があるものの分かれており、特に横穴式石室墳とは完全に分離する。

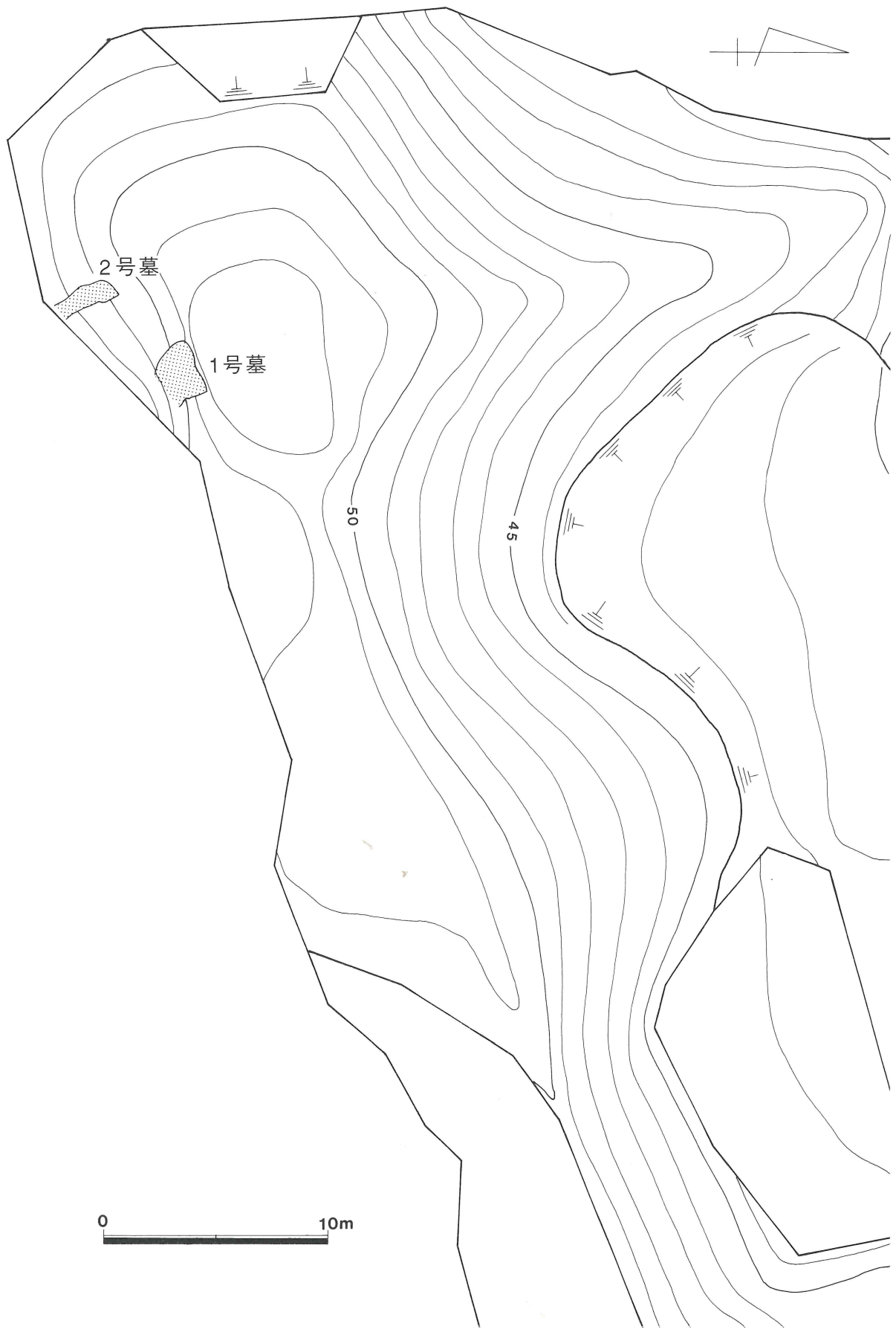
このように、市内の当該期の墓制は他に類を見ない特徴を示している。

No.	遺跡名	調査年	調査結果	調査原因
1	大六山遺跡	1982	方形周溝墓18（弥生時代後期～古墳時代前期）	農場建設
1	大六山遺跡	1991	方形周溝墓4、住居跡5（弥生時代後期～古墳時代前期）	ゴルフ練習場建設
2	深谷遺跡	1986～87	住居跡37（弥生時代後期～古墳時代中期）	エコポリス建設
3	安養寺遺跡	1988	住居跡75、掘立柱建物跡3（弥生時代後期～古墳時代前期）	エコポリス建設
4	菖蒲ヶ谷遺跡	1999～2000	住居跡25など（弥生時代終末～古墳時代前期）	高校建設
5	新田遺跡	2000	住居跡4など（弥生時代後期）	花鳥園建設
6	鶴本横穴群	1991	横穴墓3（古墳時代後期）	IC建設
7	鶴本古墳群	1991	古墳主体部2	IC建設
8	矢崎横穴群	1992	横穴墓7（古墳時代後期）	IC建設
8	矢崎横穴群D群	1995	横穴墓3（古墳時代後期）	区画整理
9	杉谷城	1995～96	堀切、竪堀、土塁（戦国時代）	区画整理
10	京徳横穴群	1996～97	横穴墓1（古墳時代後期）	区画整理
10	京徳横穴群	2000	横穴墓7（古墳時代後期）	区画整理
11	茶屋辻横穴群	1997～98	横穴墓18（古墳時代後期）、古墳2（古墳時代中期）	区画整理
12	七ツ枝横穴群	1999	横穴墓2（古墳時代後期）	農地造成
13	栗下古墳	1999	古墳1（古墳時代中期）、土坑墓1、火葬墓（江戸時代）	区画整理

第1表 周辺遺跡発掘調査一覧表（平成12年度現在、No.は第1図に対応）



第2図 遺跡周辺地形図



第3图 遺構全体图

II 調査の内容

今回調査した七ツ枝横穴群は、その東側に広がる低丘陵地から派生した痩せ尾根の南面に位置するが、周囲は開発が進み、かつての地形が分からなくなりつつある。今回調査した2基の横穴墓は南東に開口部があり、いずれも大きく破壊を受け残存状況が非常に悪かった。1号墓、2号墓の順に報告する。

1. 遺 構

1号墓（第4図）

確認調査により所在を確認した際の状況は、玄室の天井全部、左壁と奥壁の大半、玄室中央部付近から玄門、羨道、羨門部が削平により消滅していた。玄室内には崩落土が覆土として約50cm堆積していた。

主軸方位は、N-17°-Wを示す。玄室床面の標高は47mを測る。床面は、残存する部位で最大幅2.35m、長さ1.8mを測る。左壁側から右壁側にかけて大きな段差がみられるが、これは崩落か後世の攪乱によるものと考えられる。よって、床面が残存しているのは左壁側の一部と推定される。左壁と奥壁との隅は角の取れた隅丸状を呈するが、平面形は判然としない。奥壁は推定の床面から主軸上で約1m、左壁は床面から60cmしか残存していない。右壁は約1mを測るが、壁面の崩落が著しい。天井形態、閉塞状況等は削平により不明である。

遺物は出土せず、崩落土中からガラス瓶などを確認した。

2号墓（第5図）

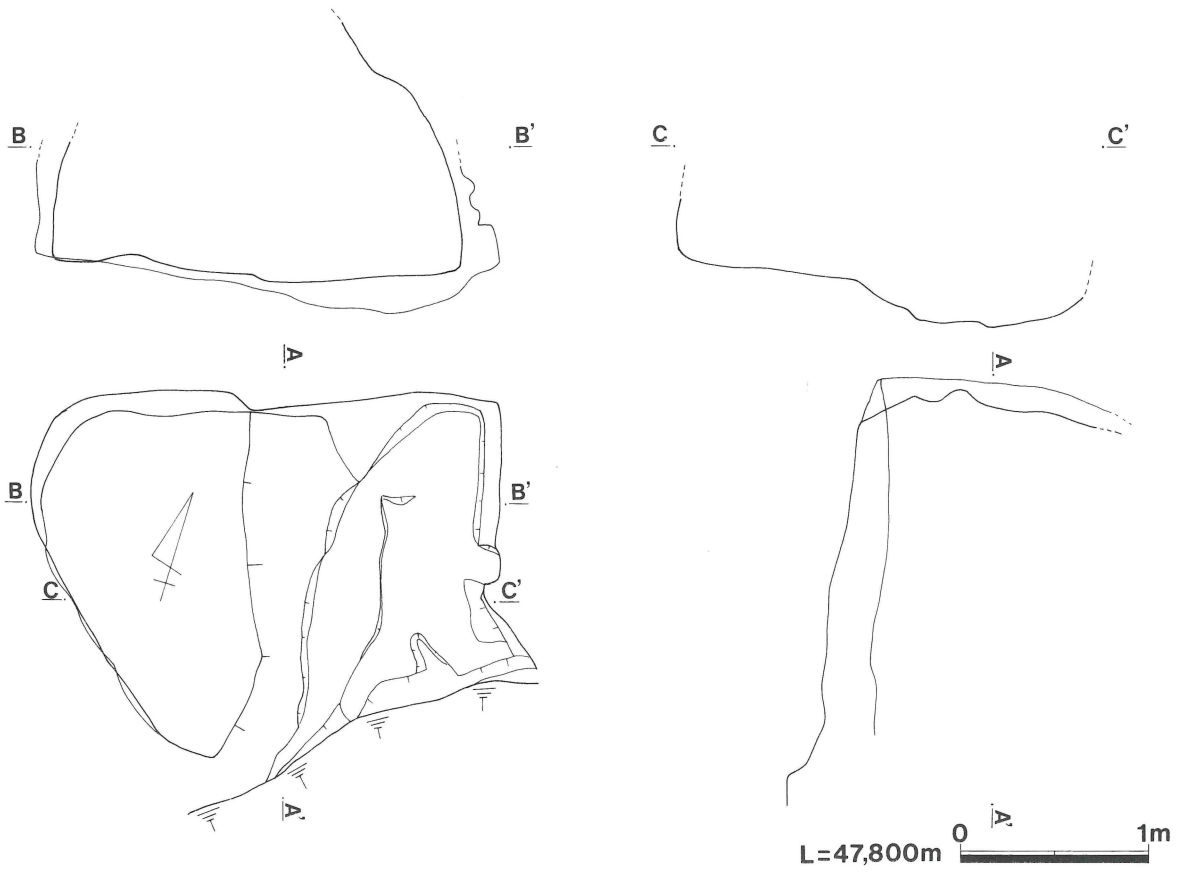
2号墓は、1号墓から南西に約5m離れている。確認調査において数個の閉塞石を確認したものの、それ以外は削平と崩落土の堆積により、残存状況は不明であった。

主軸方位は、N-31°30'-Wを示す。玄室床面の標高は46mを測り、1号墓よりも1m低い。玄室床面は右壁側が残存していたものの、主軸から左壁側にかけては削平されていた。現況ではほぼ平坦である。推定した玄室中央部で残存する幅80cm、長さ80cmを測る。残存する右壁は袖を持ち、隅丸状を呈する。壁面は、右壁が一部残存するものの、奥壁および左壁は完全に消滅していた。よって、玄室の形状は不明である。

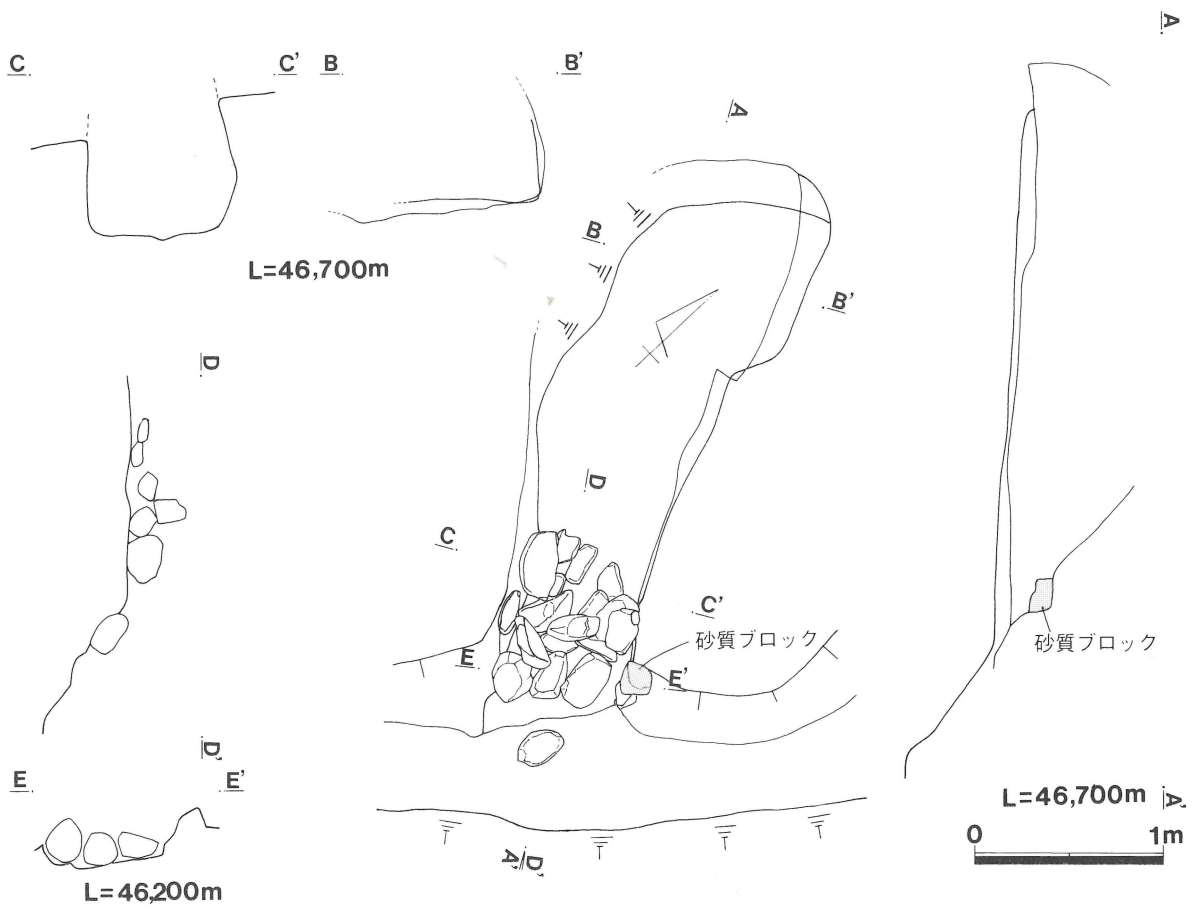
羨道は、上部が削平されて消滅していたが、全長1.8m、玄門部で残存幅65cm、羨門部で幅65cmを測る。玄門部から羨門部に向かって緩やかに傾斜している。

閉塞石は床面から高さ30cm、主軸方向で1.25m分残存していた。さらに、羨門前面には崩落したと考えられる閉塞石が数個散乱していた。閉塞石は30cm前後の川原石を使用していた。また、羨門の右袖部に砂質ブロックが認められた。

遺物は、第6図に示した土師器の小碗1点が玄室内の崩落土を除去中に出土した。また、崩落土を洗浄したところ、人骨の微細片が確認できた。しかし、これ以外に出土した遺物はなかった。



第4図 1号墓実測図

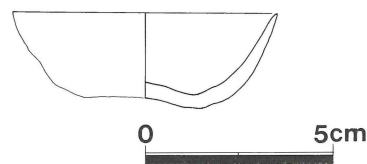


第5図 2号墓実測図

2. 遺物

前述したように、今回の調査した横穴墓は破壊による削平が著しく、遺物はすべて散逸しているのではないかと予想したが、辛うじて2号墓から土師器の小碗が1点出土した。

口径7.0cm、器高3.0cmの小型の碗で、口縁に欠損が認められるものの完形である。古墳時代後期のものに比定される。



第6図 出土遺物実測図

Ⅲ ま と め

今回調査した七ツ枝横穴群は、大半が削平されていた上に、遺物の出土もごく僅かであった。そのため、十分な調査成果は得られなかったが、若干のまとめをしてみたい。

調査された2基の横穴墓は、1号墓から遺物の出土がなかったが、2号墓との隣接状況やほぼ同じ標高に位置することから同時期のものと考えられる。前述したように、『遠江の横穴群』には基数3基の記述があるが、いずれにしろ1群としては小規模な横穴群である。市内で確認されている横穴墓は994基、119群で、これを平均すると1群あたり約8基強となる。その中には100基を超えるものや1基単独でも地域の首長墓と考えられるものもある。今回の調査地周辺では、18基検出された茶屋辻横穴群があり、造墓方法や出土遺物に特徴がある。規模の大小は、被葬者の身分や家族内での序列を反映していると考えられており、七ツ枝横穴群の被葬者像が伺える。

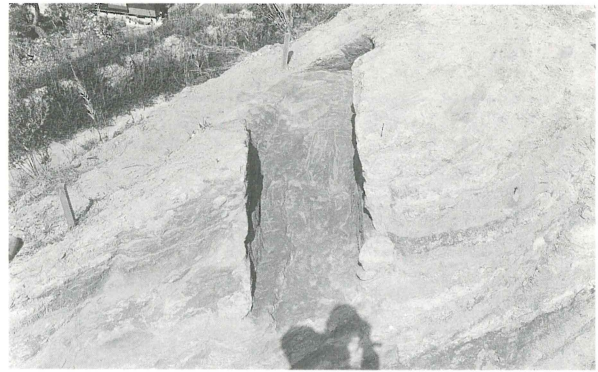
七ツ枝横穴群周辺の様子について土地所有者や周辺住民に話を伺ってみると、1号墓は今から約50年前には既に開口し、「芋穴」として利用していたようである。さらに、調査地点の東側に広がっている茶園は、もともと水田だったところに調査地点の北側の丘陵を削平した土砂を埋めて造成したようである。このように、かなり前から地形の改変が大規模に行われ、横穴墓造墓時の地形の様子を伺い知ることは難しい。近年のいわゆる考古学ブームにより、市民の埋蔵文化財に対する関心が増し、発掘調査に対する理解が浸透しつつあるが、本例のように調査前に破壊されてしまうケースもある。埋蔵文化財行政側の周知が徹底していなかったことは反省しなければならないが、それでも、既に大半が削平された横穴墓について、土地所有者から事前連絡があり発掘調査できたことは、理解浸透の現れではないかと思う。

(参考文献)

静岡県教育委員会	『遠江の横穴群』（地名表・分布地図編）	1983
掛川市教育委員会	『三十八坪横穴群A群発掘調査報告書』	1988
掛川市教育委員会	『掛川市遺跡地図・地名表』	1994
掛川市教育委員会	『新田横穴群D群発掘調査報告書』	1997
掛川市史編纂委員会	『掛川市史 上巻』	1997
掛川市史編纂委員会	『掛川市史 資料編 古代・中世』	2000
財静岡県埋蔵文化財調査研究所	『大谷横穴群発掘調査報告書』	2000



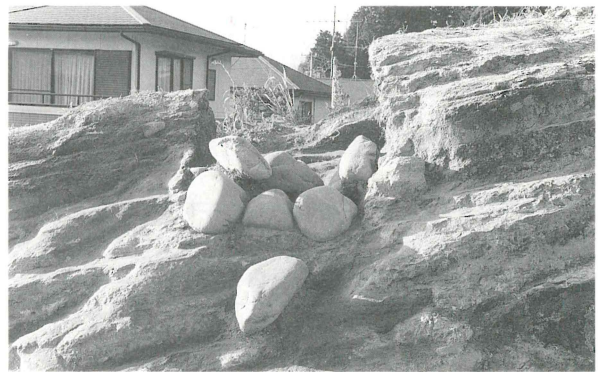
発掘調査前全景



2号墓完掘状況



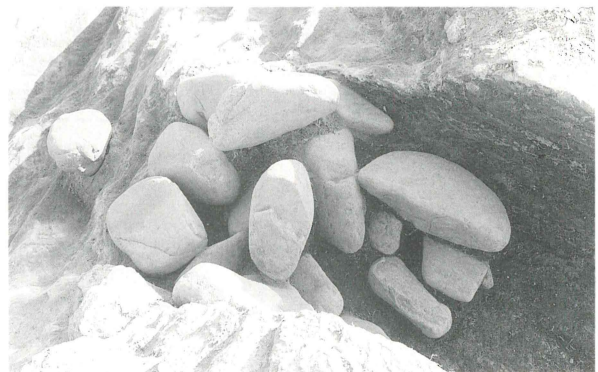
作業風景



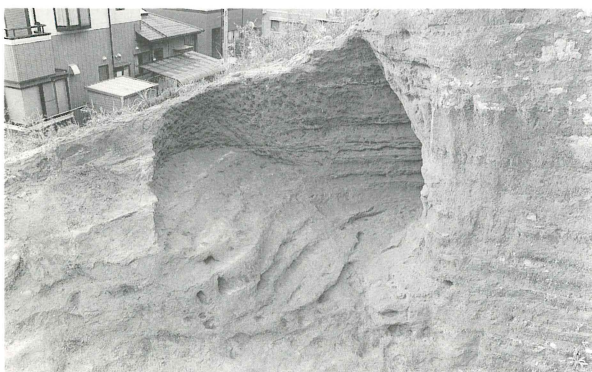
2号墓閉塞石検出状況



完掘状況



2号墓閉塞石検出状況（微細）



1号墓完掘状況



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ななつえだおうけつぐん							
書名	七ツ枝横穴群							
副書名	平成11年度農地造成に伴う発掘調査報告書							
編著者名	村松弘規							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷701番地の1 TEL(0537)21-1158							
発行年月日	西暦2001年3月23日							
ふりがな		コード						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ななつえだよこあなぐん 七ツ枝横穴群	静岡県掛川市 杉谷384他	22213	K-103	34度 45分 40秒	138度 2分 17秒	19990907 ～ 20000327	100m ²	農地造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
七ツ枝横穴群	横穴墓	古墳時代後期	横穴墓2基	土師器、人骨片				

七ツ枝横穴群

平成11年度農地造成に伴う発掘調査報告書

2001年3月23日発行

編集機関 掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷701番地の1
TEL 0537-21-1158

印刷 有限会社 幸栄印刷
静岡県掛川市弥生町21
TEL 0537-24-4341(代)